

上映映画解説

1956, 6 ~ 7

国立近代美術館 フィルム・ライブラリー



No. 42

人情紙風船

「人情紙風船」鑑賞会について

フィルム・ライブラリーの特別鑑賞会では、歴史的な価値のある芸術性豊かな古典映画をとり上げてきましたが、今回はその第二回として、六月二日から七月一五日まで、毎週三回（土・日・水曜日の二時）PCLの「人情紙風船」を上映します。

人情紙風船

一〇巻

PCL前進座提携一九三七年年度作品

脚本……………三村伸太郎
 監督……………山中 貞雄
 撮影……………三村 明
 録音……………安田 重遠
 音楽……………太田 忠
 美術監督……………岩田専太郎

キャスト

髪結新三……………中村鞆右衛門
 海野又十郎……………河原崎長十郎
 家主 長兵衛……………助高屋 助藏
 弥太五郎源七……………市川 笑太郎
 金魚売 源公……………中村 鶴 藏
 按摩の敷市……………坂東調右衛門
 夜そは屋の甚七……………中村 進五郎
 流しの与七……………中村 公三郎
 古傘買ひの乙松……………市川 岩五郎
 錠前屋の兼吉……………市川 菊之助
 醫師の卯之公……………沢村 比呂志
 徳兵衛……………山崎 長兵衛
 吉兵衛……………坂東 大助
 源七乾分猪助……………市川 崑 司
 〃……………(現在)加東大介
 役 人……………市川 章 次
 目明し 弥吉……………市川 楽三郎
 毛利三左衛門……………橋 小三郎
 白子屋久左衛門……………御 橋 公

白子屋久兵衛……………嵐 芳三郎
 忠 七……………瀨川 菊之丞
 長 松……………市川 扇 升
 らをしかへや……………瀨川 花 章
 同 平六……………嵐 敏 夫
 白子屋の娘お駒……………霧立 のぼる
 又十郎の女房おたき……………山岸 しづ江
 源公の女房おてつ……………原 緋紗子
 甚助の女房おちよ……………一ノ瀬ゆう子
 乙松の女房おくま……………岬 たか子
 久兵衛の女房おなつ……………岩田 富貴子

解説

「人情紙風船」は、河竹默阿弥の「梅雨小袖首八丈」に取材した三村伸太郎のオリジナル・シナリオにより山中貞雄が目活からPCLに移って第一回目（そして最後の）の作品として、前進座とタイ・アップして監督したものです。封切は昭和一二（一九三七）年八月二五日に、日比谷映画劇場その他で行われ、可成りの好評を得ました。

山中貞雄（1909～1983）は、稲垣浩・伊丹万作と共に、昭和初期（サイレント末期からトーキー初期にかけて）の映画界に活躍し、新しい時代劇映画の創造に努めた異色ある監督です。昭和七（一九三二）年、弱冠二三才で処女作「抱寝の長脇差」を発表して注目を集めた（同年度「キネマ旬報」ベスト・テン第六位）山中は、「盤嶽の一生」「鼠小僧次郎吉」「風流活人剣」「雁太郎街道」「国定忠治」「街の入墨者」などの力作をあいっいで監督しましたが、今回上映の「人情紙風船」を最後として、昭和一三年、日支事変に三〇才の若さで、その才能を惜しまれながら戦病死したのですが、日本映画史上に特異な地位を占めているといえます。なお、今回上映のプリントは、さきに上映した成瀬巳喜男監督の「妻よ薔薇のやうに」（PCL、昭和一〇年）と共に、当フィルム・ライブラリーのために、東宝に保存されたネガから最近新しくプリントしたものです。

略筋——キネマ旬報第六一八（一九三七年八月一日）号から

こゝ江戸深川の棟割長屋、鬱陶しい梅雨どきの長雨に、日備と野天商人の住人は封じ込まれて食ふや食はずの状態。長屋の連中はと言へば、もぐり賭博の常習で弥太五郎源七親分に睨まれてる髪結新三、隣は女房おたきと紙風船の内職をしている海野又十郎と云ふ浪人。他は金魚屋の源公、按摩の敷市、夜鷹蕎麦屋の甚助に流しの与七と云ふどれもその日暮しの手合である。侍望の上天気だ、さあ商売と勇んで出かけやうとする。長屋の入口に岡ツ引が頭張って通行止・同じ長屋の住人でお老れた浪人が生活難で首をくったのだ。一同お調べが済んだ頃はもう日が暮れてしまった。家主長兵衛は番所で散々油を絞られた揚句、新三の口車に乗せられお通夜の酒五升をせびられた。お通夜は木魚にあはだら経、三味線まで入ってひどく陽気だ。棟結きの又十郎は洗石に武士の面目、一人ものうい夕餉をとる。翌朝、長屋の連中が宿酔から漸く醒めた頃。又十郎は今日も亦仕官の途を求めて家を出る。唯一つの頼みは毛利三左衛門と云ふ江戸詰の侍で又十郎の父に一方ならぬ恩顧ある男、だか何時も酸味な返事しか貰へなかった。

木場の老舗白子屋の箱入娘お駒を家老の伴が嫁にと所望、その手つきを依頼された毛利三左衛門大童である。だが肝心なお駒には番頭忠七と云ふ気持ついた男がある。又十郎は今日も亦しくろくろく酒持て居酒屋で呑んでると、居合せた新三が酒をすゝめたが、元々さのみ呑みたい、酒でもなし勘定払って帰って行く。侍といふ奴はどうもつき合ひにくく、いけないと新三はあきらめた。懐工合が淋しいので、翌朝新三は髪結道具をかたに二両ほど借りたといふ頼みに出かけたが、番頭忠七にべもなく断はられた上、かねて睨まれてゐた源七の乾分共ののされてしまふ。次の晩は縁日だと云ふに又も雨で目茶苦茶。人目忍んでお駒と忠七はお寺の門で雨宿りしてゐる。忠七が傘をとり一走り出かけた後はお駒一人。通りかゝった新三の目にお駒

の白い襟筋がうつゝた。助けを求めぬ悲鳴が土砂降り
の雨の向ふに消えて行く。新三がお胸を扱ったのだ。
色恋や金が目あての沙汰ではない。たゞ白子屋に入
りして威張りくさってゐる弥太郎源七の鼻をあかし
てやりたかつたためである。白子屋は上を下への大騒
ぎ。源七が掛け合ひにきて、家主長兵衛が仲へ入って
結局五十兩でけがついた。お胸は又十郎の家に預け
てあった。その晩長屋繰出の大酒盛りだ。口さがない
長屋の女房どもは、又十郎の噂をはじめる。やれ片棒
かついでゐたの、みかけによらぬ悪党だのと。親戚へ
泊りがけて出掛けて帰って来た又十郎の女房は、この
噂を耳にし、いかに零落したといへ、あまりにさ
し夫の意見で、内職用の短丁(懐刺の誤?)——引用
者)で又十郎を刺し、自らも喉をついて倒れる。(女房
が噂を耳にしたのと、酔つた夫の懐中から出た金から
邪推したこと、それに仕官の望がないのをはかんだ
と思われる——引用者)髪結新三も源七一味に閻魔堂
橋に呼び出されて出かけたが、これも恐らく生きては
帰れない。朝になると又十郎の家の前は長屋の連中
一杯だ。今夜も亦お通夜で呑める。入口は岡ッ引が張
り込んで通行止。手持無沙汰の岡ッ引が紙風船をなぐ
さんでゐる。大方又十郎の家で見つけたのだらう。
(引用文の仮名づかひはすべて原文のまま)

山中貞雄の思い出

菅見恒夫

山中貞雄が中支の戦場で、戦病死をして、今年で十
八年目になる。三十歳だった彼が、生きてゐると、現
在四十四歳、映画監督として働き盛りであるが、その
山中の名前も、戦前からの映画ファンや、友達の間だ
けの記憶に残っているにすぎない。二十三歳で、処女
作「抱擁の長脇差」によって、識者の注目をひき、そ
れから七年間の監督生涯をかけて、一作一作と問題の
作品を出して来た、この時代劇の秀作も、十何年かの
歳月によって、もはや、遠い思い出の人となつたのは

映画芸術家の宿命とも云うべきか、彼を偲ぶよすがと
して、その最後の作品となつた「人情紙風船」の他、
「百万両の壺」が、わずかに残骸を残しているにすぎ
ない。

山中貞雄の生前における印象や、地位を知るために
現在の日本における時代劇の立場を当てはめるだけで
は適当ではない。この二〇年来、錦之助プロムなどで
興行的な地位を盛り返した時代劇ではあるが、どちら
かと云えば、きよりの時代劇といふものは、日本映画
にとつて、第二義的な存在である。優秀映画とか、メ
スト・テン作品とかの候補としては省られない。わず
かに、時代劇部以外の監督黒沢明、溝口健二がつくつ
た「羅生門」「七人の侍」「雨月物語」「山荘大夫」などの
古典劇が、日本映画を代表しているにすぎない。今で
は色のあせた股旅ものや、大衆文芸ものは、その本道
の片隅にのけられたかたちである。

ところが、今から二十年前、山中貞雄は、その股旅
ものや、大衆文芸もので、いかに日本映画に新風をも
たらしたか。時代劇と云えば、低俗なチャンバラの観
念で育てられて来た戦後の若い観客には想像がつきか
ねるであらう。十九年の歳月にさらされたとは云え、
まず「人情紙風船」を見て、山中貞雄の世界の全貌を
感んでいたゞより仕方がないのである。

日活京都から、東京の東宝へ引きぬかれて山中が東
京へ来たのは、昭和十二年の春寒い頃だつたが「人情
紙風船」の撮影は、暑熱にうだる撮影所の中で行われ
ていた。撮影がようやく終わったのは、八月もなほす
ぎてだったが、完成もその間きわといふのに、無情な
赤紙が無いこんだ。勝つて来るぞ勇しく、という軍歌
に送られて、東京駅を立つのだが、山中はそんな勝利
なんか信じなかつたらう、戦争なんか信じなかつた
らう。彼の若い情熱は、映画をつくることしかなかつ
た。私は、彼と最後は、酒を呑んだ。戦争なんかへ行
つても、必ず生きて帰ってくるんだよ、と私は云うと、
彼も静かにうなづいて、紙風船が最後の作品になるん
じゃわしはかなわん。

そうだ、彼はやりたいことが、山ほどあった。東京
へ来たからには、現代劇をとりたたい。それには腰をす
えて、東京の生活をじっくり見ることだ。好きな酒も
もつと呑みたい。いゝ映画を見て、先輩たちのいゝ仕
事を自分にもとり入れて行きたい。来年は、藤村の「夜
明け前」もとりたたいなア、こんなことも云つた。だが
山中貞雄はついに再び帰って来なかつた。

私は山中貞雄の思い出を次のように書いた。——彼
の作家としての思い出を次のように書いた。——彼
はその当時の時代劇の慣例にしたがつて、多くの先輩
たちがやつたように、嵐小僧も手がけたし、丹下左膳も
国定忠治も、鞍馬天狗も映画の上に躍らせた。だが、
山中の手にかゝると、これらの超人的な英雄が一介の
凡庸な市井の徒になつてしまふのだ。これら市井の徒
は、山中の分身のようになって、いろいろな生活の営
みの中に入つて行く。どうやら時代劇という観念の枠
をとらぬとび出しているようではないか。

——そして、山中貞雄の死後、時代劇という観念の
枠が、この中で働く作家たちを堅く縛りつけ、きよ
の低調をもたらしつてゐるのである。
(映画評論家)

山中貞雄監督作品一覧

- 「抱擁の長脇差」昭和7・2 寛プロロ映画
- 「小判しぐれ」7・4 寛プロロ映画
- 「小笠原忠政守」7・4 寛プロロ映画
- 「口笛を吹く武士」7・7 寛プロロ映画
- 「帯解け仏法」7・9 寛プロロ映画
- 「天狗廻状・前篇」7・11 寛プロロ映画
- 「薩摩飛脚・後篇」8・4 日活映画
- 「盤獄の一生」8・6 日活映画
- 「嵐小僧次郎吉」(三部作)8・9 日活映画
- 「風流活人剣」9・3 千恵プロロ映画
- 「足軽出世譚」9・7 千恵プロロ映画
- (以上サイレント)
- 「雁太郎街道」9・11 千恵プロロ映画

フィルムセンター図書

- 「国定忠治」10・2 日活映画
- 「百万両の壺」10・6 日活映画
- 「関弥の太ッペ」10・7 日活映画
- 「街の入墨者」10・11 日活映画
- 「大菩薩峠」(第一部) 日活前進座映画
- 10・11 日活映画
- (註) 配弁良平と武化 橋垣浩監
督作品に収録
- 「怪盗白頭巾」(前・後篇) 10・12 日活映画
- 「河内山宗俊」11・4 日活前進座映画
- 「海鳴り街道」11・8 日活映画
- 「森の石松」12・3 日活映画
- 「人情紙風船」12・8 PCL前進座映画
- 右の記録は「キネマ旬報」第六六一(一九三八年一〇月二一日)号所載の岸松雄氏による旬報クワイック「山中作品の思ひ出」から再録したもので、数字は封切年月。
- (表紙写真) 右から
中村板右衛門、河原崎長十郎
助高島助助